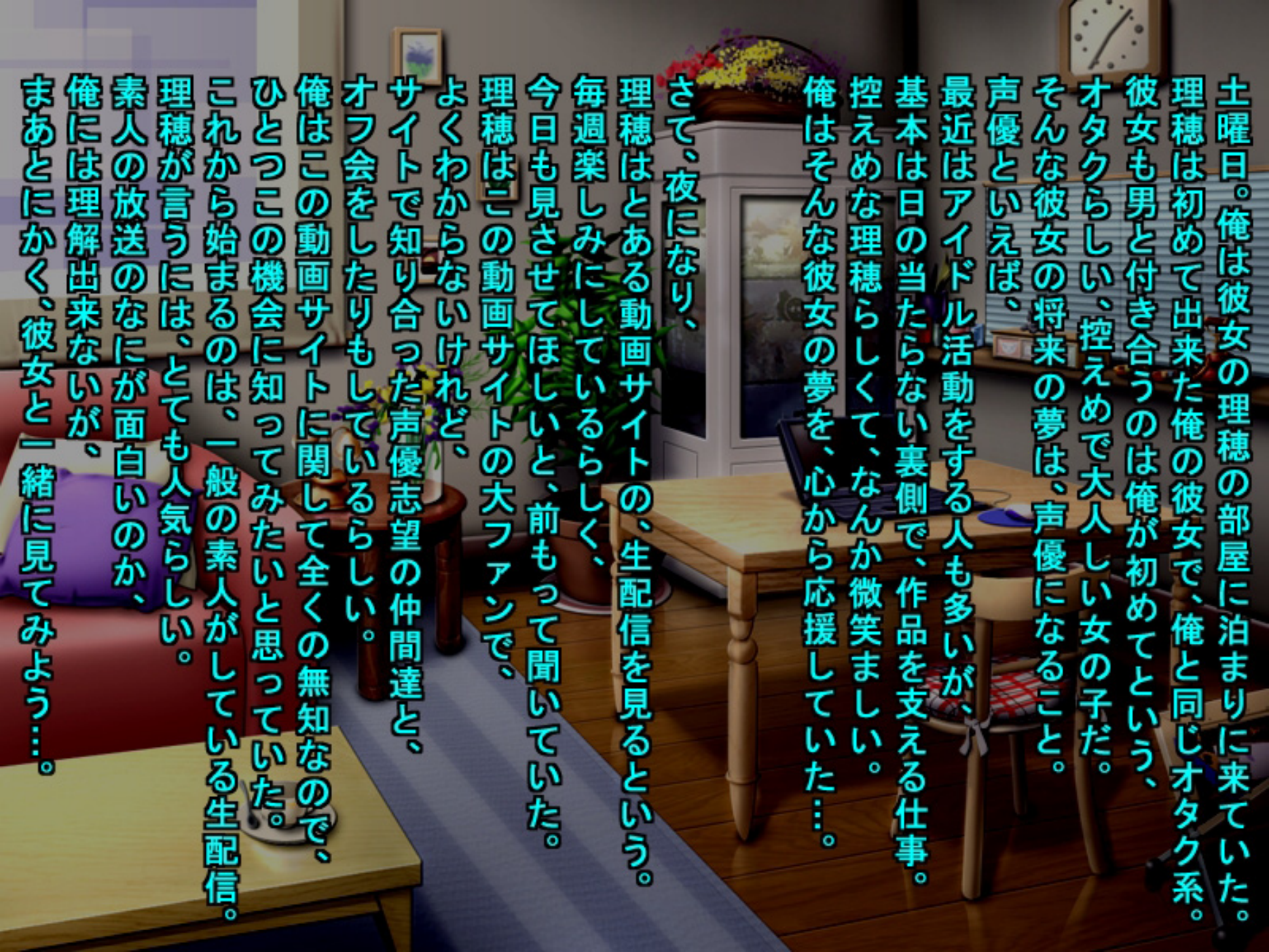


動画生配信の人気者に
簡単にお股を開いた俺の彼女

この作品はフィクションです。
作中に登場する動画サイトは、
完全に架空のものであり、
実在する人物・団体・事件等とは、一切関係ありません。
また、登場人物は全員十八歳以上です。
なお、諸事情により、登場人物名の一部を、
《ピー》音にて伏せております。ご了承ください。



土曜日。俺は彼女の理穂の部屋に泊まりに来ていた。理穂は初めて出来た俺の彼女で、俺と同じオタク系。彼女も男と付き合うのは俺が初めてという、オタクらしい、控えめで大人しい女の子だ。そんな彼女の将来の夢は、声優になること。声優といえば、最近アイドル活動をする人も多いが、基本は日の当たらない裏側で、作品を支える仕事。控えめな理穂らしくて、なんか微笑ましい。俺はそんな彼女の夢を、心から応援していた…。

さて、夜になり、

理穂はとある動画サイトの、生配信を見るという。毎週楽しみにしているらしく、今日も見させてほしいと、前もって聞いていた。

理穂はこの動画サイトの大ファンで、よくわからないけれど、

サイトで知り合った声優志望の仲間達と、オフ会をしたりもしているらしい。

俺はこの動画サイトに関して全くの無知なので、ひとつこの機会に知ってみたいと思っていた。これから始まるのは、一般の素人がしている生配信。理穂が言うには、とても人気らしい。

素人の放送のなにが面白いのか、俺には理解出来ないが、まあとにかく、彼女と一緒に見てみよう…。

「あ、始まった!」

彼女の部屋にあるデスクトップパソコンで、配信を見ることに。理穗がセッティングした画面上で、放送が開始される。映し出されたのは、普通の部屋にいる普通の男。それが、素人の生配信であることを物語っていた…。

「どうも〜！ミュージック&トークマスターの、『ピー』様だ!」

「今日もネットのむこうで俺の配信見てる雌犬達を、喜ばせてやるからな！覚悟しておけよ!」

「……」

「キヤー！『ピ』様♪♪」

「今日もかっいっいっ♪」

「……」

男の発言とほぼ同時に、動画下に表示される「コメント」のキャラとファンのこのノリ……。まあ理穂が好きなものという「とは、女性に人気のものなのだろうから、こういうノリは、ある程度予想していた。」

「わあ〜『ピ』様♪♪わあ〜♪」

だから理穂のこういう反応も、想定内。男を様付けで呼んでいることも、不愉快だが、彼自体がそういうキャラなのだろう。大丈夫。俺は理解のある彼氏なのだ。これくらいでへそを曲げたりはしない……。

「では早速俺の歌を聞いてもらおうかな。」

今日の一曲目は、あの神曲のカバーだ！いくぜー！

「あ、歌が始まる。準くんも聞いて聞いて！
『ピー』様、もう超々歌が上手いの！
ファンの間では、
音楽の歴史を根底から変えたとすら言われてるの！
だから聞いてみて！マジすごいから！」

「うん…わかったよ…」

歴史を変えた割には歌うのはカバーなのかとか、
そもそもカバーじゃなくてコピーだろうとか、
言いたいことは色々あったが、
まあともかく、言われた通り彼の歌を聞く」と。

「君が微笑んで僕に♪」

「……」

「その心がらなによりもら」

「あーうまあーい♪やっぱりすこいわ《ピ》様♪
ねえすこいでしょ準くん！聞いてよこの高音！」

「……」

理穂は感嘆していたが、俺は正直……だった。

確かに男にしては高音がよく出ていて上手だが、
なんか機械に近いような歌で、

味がないというか、上手いだけというか、
なんとというか、心に響いてくるものがない……。

「あーすこかったら♪パチパチパチー！」

やがて一曲目が終わる。俺にはわからなかったが、
これが好きという人もいるんだろう。それは当然だ。
他人の、そして彼女の趣味にまで、とやかく言うまい。
でも俺がこの動画サイトにハマることはなさそうだ。
そんな風に結論して、俺はこの動画サイトとの関係を、
これで終わりにしようとした。が、しかし……。

「《ピ》様歌上手すぎさー♪耳が濡れちゃさう♡」

「……へ？」

歌が終わった直後、動画下に現れたコメントに、再び意識を画面に引きつけられる。
なんだ？耳が……濡れ……？

「あ～ん♡♡♡もう私の耳びちよ濡れ♡♡♡」

「《ピ》様との耳セックス最高！耳イキまくり♡♡♡」
「なっ…」

愕然とする俺をよそに、奇妙奇天烈なコメントは続く…。

「耳パコパコでアクメくる♡！あ～ん♡♡♡」

「《ピ》様の歌テンポ超デカい♡耳マジ濡れ♡♡♡」
「歌エッチ最高♡高音精子、耳で出されたあ♡♡♡」
「なっ…なっ…」

「私主婦だけど、《ピ》様との歌浮気大好き♡♡♡」
「あなた♡私、耳で浮気しまくってます♡♡♡」

「あ～ん♡《ピ》様もっとお♡♡♡」
「私達雌犬の耳に、もっと歌テンポ入れて♡♡♡」

「…なんなんだよ、これは！」

俺は、思わず大声で怒鳴っていた。

「へ？ど…どうしたの、準くん…？」

「どうしたも…うしたもあるか！」

なんなんだこのコメントは！おかしいだろ！」

「え？ああ…これ？」

これはまあ…動画サイト特有のノリというか、まあ、ネタというか…」

怒り狂う俺に対して、理穂は至ってなんでもない風だ。その温度差にショックを受けつつも、俺は続ける。

「ノリ…ネタって…こんなの普通じゃないだろ！
こんな卑猥な言葉並び立てて！狂ってるよ！」

「そんな…こんなのこの動画サイトじゃ普通よ？
目くじら立てて怒るようなことじゃないって…。
みんな本気で言ってるわけじゃないし…。
ただの言葉遊びみたいなものだよ？」

「ぐっ…」

俺が今感じている気味の悪さみたいなのを、理穂が全く感じていないことが歯痒かった。彼女との間に、大きな隔たりを感じた…。

「いや、絶対おかしいってこんなの！」

だってこの動画サイトは、**も見るんだろ？**

に見せちゃダメだろ、こんな卑猥なもの！」

「いや…だからそんな大袈裟なことじゃなくて…。ただのネタだからさ…」

「ネタで済む話か！理穂、もう見ないでくれ！
こんな動画サイト！」

「へ？いや無理無理無理！ありえないから！」

理穂のその即答に、

俺はまた、二人の隔たりを感じてしまい…。

「くっ…もういい！帰る！」

「あ…準くん…」

一方的に会話を打ち切り、

逃げるように、彼女の部屋を飛び出していた…。

あれから、一週間が経った。

理穂とはメールで少しやり取りしたただけで、すっかり疎遠になってしまっていた。

絶交状態というわけでもないのだけれど、今まで通りに彼女と接することが出来ない……。

それくらい、俺にはシヨックな出来事だったのだ。

俺は、ネットで件の動画サイトについて調べてみた。今まで全く知らなかったのだが、

表現や文化の場として機能する一方で、あの動画サイトでは、

ああいう卑猥なやり取りも一般化しているらしい。勿論全ての人がしているわけではなく、やっているのはごく一部の人だろうけれど、

も利用する動画サイトで、

当たり前のように卑猥な言動をする大人がいる。

俺はそのことに、激しく憤りを覚えていた。

そして、調べていく内にわかったのだが、

卑猥な言動というのは、

なにもああいうコメントだけではないらしい。いいやむしる、

ああいうのは問題の末端に過ぎないようなのだ……。

なんでも、投稿する動画や生配信そのもので、
そういった卑猥な言動をする連中も多いというのだ。
実物を見ていない俺には、
それがどういう類のものかわからないのだが、
ネットの掲示板で、それらは激しく批判されていた。

そして、非常に残念なことに、

その掲示板で、最も辛辣な非難を受けていたのが、
理穂が大ファンだという、《ピー》という男なのだ。
なんでも彼は、とても卑猥な生配信をしているらしい。
そんなことをして、何故女性ファンが離れないのか、
ましてや理穂が何故そんな奴を好きなのか、
甚だ疑問だが、むしろ彼には、
熱狂的な女性ファンがついているのだという……。

理穂の彼氏として、あの《ピー》という男が、
どんな生配信をしているのか知らなければならぬ。
そう考えた俺は、ネットの海を探索し、

《ピー》の生配信の録画動画を二本、発見した。
そして今から、それを見ようとしている。

理穂が大ファンだというあの男は、
一体どんなことをしているのか……。

覚悟を決めて、俺は動画を再生した……。

「ミュージック&トークマスターの『ピー』様だ！
今日もお前ら雌犬の耳を、

濡れ濡れのびしょびしょにしちゃうぜ〜！」

「きゃー！『ピー』様〜♡♡♡

今日も歌チンポで私達の耳、犯しまくってえ〜♡」

「じゃあ今日の一曲目いくぜー！」

「耳マンヨ準備万端♪歌チンポ、カモオ〜♡」

どうやら彼の生配信は、歌から始まるらしい。

この部分は前に見て知っているので、早送りする。

歌以外のなにかは始まらないかと見ていると、

やがて動画は、『ピー』が歌っている様子から、

彼とは別の部屋にいる、女性の映像に切り替わった。

『ピー』の映像は小さくなり、右下に移動している。

このサイトについて調べる内に知ったのだが、

こんな風にネットでパソコンを繋ぎ、

両者がやり取りする様子を、

生配信で放送することが出来るらしい。

要するに、『ピー』の生配信に、

この女性がネット越しに出演している、

といったところだろう。

なにかが始まる…。そう直感した俺は、

女性が登場するところから、じっくり見ることにした。

「はい！今日の生贄はお前！」

「え？う、うそ？私？」

驚く女性の反応から、恐らく出演希望の複数の女性の中から、《ピー》が一人を選ぶというシステムなのだろう。それにしても、生贄って…。

「えー！私じゃないの？？」

「いいなあ！私も《ピー》様選ばれたらいい！」

「ははは♪じゃあお前！」

早速タイトルコールいくぞ！

《ピー》様の『せーのっ！』

「生贄に、なりたあ〜い♥♥♥」

「……」

「オーケーー！じゃあ早速自己紹介しろ！」

「はい♥山梨穂花、十九歳、学生です♪

《ピー》様の生贄になれるなんてもう超ハッピー♪」

「はは！そうかそうか！」

それにしても乳でけーなお前！

しかもそんな格好で見せつけやがって！」

「ああん♥これはあ、《ピー》様に見てもらいたくて、準備してたんです♥どうですか？私のおっぱい♥大きいでしょ♥ほらほら！うりうりうり♥」

「がはは！さすが俺のファン！」

俺が喜ぶことわきまえてるな！」

「そりゃ勿論！私、《ピー》様の雌犬ですもの♥」

「自分で言うかよ普通！はは！

おい、じゃあ雌犬！わんわんって吠えてみる！」

「はい♥わんわん！わんわん！わんわん！

穂花は《ピー》様の雌犬ですわんわんわん！」

《ピー》様相変わらずドS♡♪ブレないな♡♪」

「いいなあ♪私も《ピー》様に調教されたあ♡い♡」

「……なんなんだ、これは」

ある程度のもものは予想していた。

けれどこれは、俺の想像を遥かに越えていた。

出演女性も、コメントで参加しているリスナーも、

《ピー》の言動を当たり前前に受け入れ、喜んでいる。

その閉じた感じが、気味悪くて仕方ない……。

「よし、じゃあ次、あれ言ってもらおうか？」

「あ、はい♥」

「あの三文字！お前がこの世で一番好きな三文字だ！大勢の人に見られてるって意識しながら！

ちゃんと大声で言うんだぞ！せーのっ！」

